

南極観測と地球環境

第35次南極観測隊越冬隊長 横山宏太郎



サストゥルギと地吹雪の氷床上を進む内陸旅行隊

一、はじめに
日本の南極観測は一九五七年に第一次隊によって昭和基地が建設されたことに始まり、以来四十年が経過しました。その間、初期には日本山岳会の先輩方が大活躍されたことはご存じの通りです。第三十五次(一九九三〜九五年)日本南極地域観測隊は、観測隊長兼夏隊長(渡辺興亜氏)と副隊長兼越冬隊長(筆者)とも会員でしたので、出発前に「山」で紹介していただきました。帰国後も科学委員会、また今回と南極を紹介する機会をいただき感謝しております。
現在の観測はオーロラ、大気、氷床、地殻、海中の生物など多岐にわたりますが、その多くは地球環境に関連したものです。地球温暖化をもたらし、二酸化炭素やメタンなど温室効果ガスの増加が観測されていますし、オゾンホールは日本隊の観測に

よって発見されました。それらも詳しく紹介したいところですが、紙数の都合で割愛させていただきます。
二、観測隊と昭和基地
観測隊は越冬隊(第三十五次では四十人)と夏隊(同十六人)からなります。十一月十四日に観測船で東京を出発しました。観測船は海上自衛隊が運航(第七次以降)しており、乗組員(自衛官)は約百八十人です。
昭和基地は四棟の建物から始まり、建物の数で十倍以上、延べ面積では二十倍以上になりました。発電機の容量は十倍になり、それだけ観測も充実し、生活条件もよくなっています。発電用の燃料消費も十倍になっています。越冬隊員は第一次が十一人ですが、第三十五次では四十人でした。これを支えるのは観測船の輸送力です。現在の「しらせ」では観測隊の物資約一〇〇〇トンで



1998 年 (平成 10 年)

3 月号 (No.634)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

南極観測と地球環境	1
カパディア氏夫妻の来日	4
追悼・吉沢一郎氏を悼む	5
報告	
科学委・火山ガス災害防止で科学技術庁が委員会設置	6
図書管理委・ネパールの新 5 万分の 1 地図を入手	6
三水会・裏高尾、鐘撞堂山	6
海外の山・トロフィエの「幻覚」	7
支部だより	
岐阜支部・大ヅレ山秋季山行	8
宮崎支部・国見山の眺望	8
静岡支部・熊伏山懇親山行	9
東西南北	
「空へーエベレストの悲劇はなぜ起きたか」を読んで	10
上高地インタープリターの 4 年 10 月	10
理事黒田孝雄氏との山行	11
短歌・山小屋にて	12
翔ぶ和蘭人異聞	12
外国人登山者のこと	13
図書紹介	14
図書受入報告・新入会員	16
会務報告	17
会員異動・ルーム日誌	18
「さんけん」だより	18
INFORMATION	19

▶日本山岳会事務取扱時間

月・火・木・土曜日 10~20時
水・金曜日 13~20時

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜日を除く毎日 13~20時

運びますが、ぎりぎりになっていきます。このうち約半分は燃料です。

十二月の中頃に南極に着くと真夏です。夏の約一か月半は太陽が沈みません。まずは一〇〇〇トンの物資の輸送です。基地のヘリポートまでは海上自衛隊のヘリコプターで、そこから先は隊員がトラックで運びます。次は建設です。古くなった建物を順に建て替えています。二、三人の専門家の指導で、あとは素人の隊員たちが作業します。夏の気温は〇度C前後、晴れて風が弱ければ、力仕事では汗ばむほどのです。

二月初旬、夏隊と前次の越冬隊は南極を離れ、四十人だけの越冬生活が始まります。途中では食糧も何も一切の物資の補給はなく、外からの援助もなく、発電、水造り、食事、医療、通信はもとより散髪など日常生活、消防など非常時のことまですべて自分たちだけでやることになります。

だんだん暗く、寒くなっていく秋の楽しみはオーロラで、眺めていれば寒いのも忘れるほどです。冬、太陽が出ない時期が五月末から一か月半くらいあります。冬の昭和基地はマイナス三〇度C前後、これまでの最低気温はマイナス四五・三度Cです。太陽が帰ってくる頃がいちばん寒い時期ですが、そこを過ぎるとど

んど暖かく、明るくなります。生物の活動も活発となり、野外調査も盛んに行われます。二度目の夏、迎

えの船がやってきて越冬生活が終わります。オーストラリアまでは船、その後空路帰国するのが三月末です。

昭和基地の中心は新しい三階建ての管理棟で、食堂や通信室、隊長室があります。新しい建物は窓が広く明るく、快適です。二人の調理担当隊員(本職のコックさんです)が腕をふるい、年間食事を作ります。

越冬中の食糧は合計四〇トン、一年で一トンという勘定になります。肉や魚は冷凍で問題ありませんが、野菜は冷凍ではダメなものもあり、だんだん新鮮な野菜が不足してきます。それを補うために、小規模ですが水耕栽培でサラダ菜やネギを作ります。モヤシ、カイワレダイコン、ミニトマト、キュウリなどは暖かい建物で作ります。

電気、熱、水などの源で、昭和基地の心臓ともいえるのが発電棟です。発電機は三台あり、交代で運転しますが、常に順調に作動するためには普段の点検と確実な整備は欠かせません。水は外の水槽に雪を入れて融して作ります。雪入れの仕事は皆でやります。風呂は以前に比べると大きくなり、またほとんど毎日入ることができました。水の使用料は日本

の半分以下ですが、十分快適です。造水、風呂や一部の建物の温水暖房の熱源には発電機の排熱が非常に効率よく利用されており、燃料の消費を抑えるのに貢献しています。

昭和基地の娯楽はビデオ、ゲーム、バー(お酒)といったところでしょいか。スポーツもソフトボール、サッカー、スキーといろいろやりました。ミッドウインター祭(冬至の祭り)では厳寒の露天風呂に入ったり、様々な催しや遊びで楽しく過ごすごとができました。

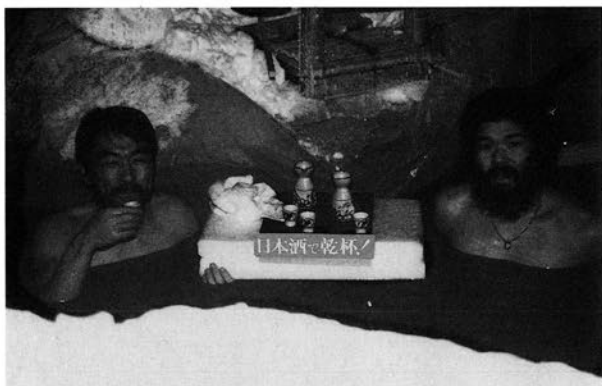
基地の中は快適ですが、外は厳しい南極の自然です。「ブリザード」は台風のように雪が降っているようなもので、「伸ばした手の先が見えない」という表現も大げさとは思えないほどです。そのような悪天候の時は安全のために外出を制限することがあります。その判断は隊長の仕事ですが、一番気を使った仕事のひとつでした。

三、南極氷床の掘削と内陸旅行

南極は大きく見れば大陸の上に鏡餅のような氷のかたまりが乗っています。これを氷床といい、厚さは平均二四五〇メートルといわれています。これは積もった雪がさらに上に積もっていく雪の重みで圧縮されて氷になったもので、深いところの氷は昔降った雪であり、当時の空気を

泡などの形で取り込んでいます。この氷を掘削して分析すれば、気温や大気中の炭酸ガス濃度などの変化がわかります。このような結果から過去の地球環境の変化の仕組みを解明することが、これからの変化をより正確に予測することにつながります。このため、昭和基地から一〇〇キロメートル内陸、標高三八〇〇メートルの「ドームふじ」で氷を掘削する計画(ドームふじ深層掘削観測計画)が立てられました。この地点は南極全体ではいくつかある氷床の頂部のひとつで、付近の氷の流動の源であり、その氷はそこでたまったと考えられるため、分析結果の解釈に都合よいのです。南極氷床の深層掘削はこれまでも米国や旧ソ連が実施しましたが、このような理想的な場所での掘削は初めてです。

この計画はドームふじの初踏査から数えれば十年以上にわたるものになります。輸送は第三十二次隊から始まりました。私たちの第三十五次隊では必要物資を輸送するとともにドームふじに基地を作り、次の隊からのドーム越冬開始に備える計画でした。このため、内陸旅行を何度も行いました。内陸の調査旅行は、私にいわせればちょうど登山に出かけるような感じで、厳しいながらも楽



マイナス30度での露天風呂 左が筆者

しいものです。とはいえ、秋と春の中継拠点旅行（昭和基地から六五〇キロメートル）は気温マイナス六〇度C以下が何日も続きたいへん厳しいものでした。最後に春から夏にかけて、ドームふじまでの旅行と基地建設を行いました。何組にも分かれ、全体では四か月にわたる行動でした。私もこの旅行に参加し、五十四日間かけてドームふじまで行ってきました。ドームふじ近くでマイナス六七・五度Cが記録されましたが、風があまり強くなかったため、低温を楽しむ余裕がありました。

内陸旅行の主役は雪上車です。深

層掘削計画に合わせてSM一〇〇S大型雪上車が開発され、大活躍しました。ほかに従来型の雪上車やそりを牽くように改造したブルドーザーも使いました。SM一〇〇Sは大型バスを少し短くしたほどの大きさで、中にはベッドがあり、炊事もできます。これで二トン積みのを七台牽いて走ります。平均時速は約七キロメートル、片道一〇〇キロメートルのドームふじまでは二十日間みなければなりません。内陸の雪面はサストウルギ（シュカブラ）が発達しているところが多く、そこでスピードを出せば車もそりも荷物も傷みますので、これでちょうどよいのです。先導車にはGPSとレーダーを備え、自分の位置を知り、また目標に設置してある旗やドラム缶を見つ

けながら進みます。燃料はドラム缶の軽油をそりに積んでいき、そこから雪上車のタンクに給油します。寒くなってくると南極内陸用の特別製の軽油も水飴のようになります。これを手回しのポンプで入れるのは、内陸高所ではかなりの重労働です。電動のポンプはこんな低温ではまったくといっていいほど役に立たないので持っていきません。

機械は普段の点検が大事です。夕方キャンプ地へ着くと、車の下へも

ぐり、ネジのゆるみをトルクレンチで確かめ締めなおしますが、マイナス五〇度Cではじきに指先の感覚がなくなります。厳しい使用条件では時に故障もおこります。故障すれば修理するしかありません。

そんな苦勞をしながらも予定通りの輸送ができました。荷物のほとんどは基地の建設資材と燃料です。建物パネルをそりから下ろして積み上げる仕事も、低温と富士山より高い高度では楽ではありません。高さになれにくい人には、着いてから二、三日はつらかったようです。私を含めた三人は先に昭和基地へ戻りましたが、九人の隊員がドームふじに滞在して基地を建設しました。

その後、第三十六次、第三十七次とそれぞれ九人がドームふじで越冬して掘削を行い、二五〇メートルまでの掘削・試料採取に成功しました。詳しい分析は始まったところですが、過去三十五万年にわたる地球環境の変化が明らかになると期待されています。

四、おわりに

越冬を終える時は、早く帰りたいような、もっといたいような複雑な気持ちです。帰り支度で大事なものは、廃棄物の処理です。いまではほとんどの廃棄物を、可燃物を燃やした灰まで持ち帰っています。持ち帰り廃

棄物の量は約四〇トンでした。基地では廃棄物を細かく分別しますが、皆よく理解して協力してくれたようです。南極は持ち込んだもので一年間を過ごし、しかもすべて自分たちの手でやるため、自分たちの生活と活動でどれだけのものを消費し、また排出しているか、すなわち環境への影響がよくわかることです。電気や水を無駄遣いしないことが燃料の消費を減らすこと、さらに自分たちの安全につながることも実感できます。南極は地球環境を観測する最前線であると同時に地球環境について学ぶ教室でもありました。

隊員の顔ぶれを見ると、最近は山岳関係者の参加はそれほど多くありません。しかし何とんでも厳寒の極地での生活や行動において、登山の知識・技術・経験は大きな力です。また「ドームふじ深層掘削計画」では、これまでの調査地域の拡大や新たな観測の開始などの時と同様に、多くの山岳関係者が活躍しました。第九次隊の極点旅行をもって探検の時代は終わり、観測の時代になったといわれていますが、南極はまだ探検的志向を発現できる貴重な場所であると思います。

この拙文が、南極観測に対し、さらに皆様のご理解とご協力をいただくことに少しでも役立てば幸いです。

ハリッシュ・カパディア氏夫妻の来日

松田雄一

インド山岳財団(I MF)の副総裁、英国山岳会名誉会員、ヒマラヤンクラブ(HC)の運営委員で、ヒマラヤン・ジャーナル(HJ)の編集長としても知られるハリッシュ・カパディア氏(五十二歳)夫妻が、一月二十五日、日本ヒマラヤ協会(HAJ)の創立三十周年記念講演会にゲスト・スピーカーとして招かれ、来日された。

同氏より、この機会を利用して、JACでも別のテーマで講演したいとの要望もあったので、本会ではHAJの協力を得て「東カラコルム」に関する講演会を行ったほか、ギータ夫人によるヒマラヤ絵画展や、関西旅行などのお世話をさせてもらったので報告する。なおご夫妻の滞在中は、吉田宏評議員はじめ関係各位にたいへんお世話になりました。

■東カラコルムに関する講演会

一月二十九日午後六時半より、本会集会所において、青年部、海外連絡委員会が、HC日本支部(支部員約四十名のうち、ほとんどが本会会員)と共催で、同氏夫妻の歓迎会をかねて、講演とスライドの会を開催した。

会は大森副会長の歓迎の挨拶に続き、記念品の交換があり(別稿参照)

講師紹介のあった後、スライドによる講演会が行われたが、これに先立ち、カパディア氏より「長期間にわたりHCの日本支部長(Hon. Local Secretary for Japan)としてHCとJACとの橋渡しとして功労のあった大塚博美氏を、HCの名誉会員としてお迎えしたい」旨の謝辞が述べられ、HC会長からのメッセージが伝えられた。

ご承知の通り、カパディア氏は、多年にわたりシッキムから東カラコルムに及ぶ、広範囲にわたるインド・ヒマラヤの未踏山域の踏査を精力的に続けられたほかに、ボニントン氏らとの五度にわたる国際合同登山隊の隊長も務められた。当日は百六十枚に及ぶスライドを使用し、各山群の紹介、とくに東カラコルムのシアチェン氷河周辺の未踏峰については、詳しい説明があり、大変参考になった。

当日は三十数名の出席者があったが、歓迎パーティーに入ってから、カンチ遠征準備中の若手も合流して盛会であった。

今年もさよばいりで会いましょう

■ヒマラヤ絵画展

一月二十七日(三十日、インド大使館のホールで、ギータ夫人主催による Warli Tribal Paintings & Himalayan Thangka Paintings の絵画展が開催され、インドから持参した四十点の絵画が展示された。

開会式には日印協会会長の校内義雄氏も出席された。急な催しであり、多くの会員に案内できなかったことが惜しまれた。

なお展示については遠藤光雄資料委員に大変お世話になった。

■ヒマラヤのデータベース

現在HCでも、Web-Siteを構築中であり、同氏の要望もあって一月三十一日に本会データベース(DB)研究会と意見交換する会が開かれ、増山、三上、遠山、山口、高原、松田らが出席した。昨年末に公開された本会のホームページ海外版については大変参考になったとのことで、英国山岳会のヒマラヤDBを含め、今後はお互いにリンクして活用できるDBを作ることで意見の一致を見つけた。

引き続き同氏の要望もあって二月二日より二泊三日の予定で神戸、

京都の休日を楽しまれたが、神戸では寺本親会員、京都では斎藤会長、薬師、伏見両会員に大変お世話になった。かくして二月五日、成田発帰国の途につかれたが、神戸、京都の旅行については、寺本、伏見両氏にそれぞれ報告をお願いすることにした。

神戸の休日

松田氏の要望で、神戸一泊二日のホストを受け持った。

二月二日、ブルゾンにリュックの軽装で降り立った夫妻を新神戸駅でキャッチ。もともと神戸はインド人住民が多く、なかでも評判の高いインド料理屋に直行、昼食をとる。同行はラジャスタン州出身の友人で真珠商チャードリー夫妻と、ムンバイの隣町スーラトからきている神戸ロータリークラブ(寺本会長)交換高校生ラーダ嬢で、ボンベイ方言の飛び交う賑やかな昼食となった。

午後は新装の観光船「コンチェルト」にて海側からの神戸と四月開通予定の世界一、明石海峡大橋を見学した。夜は同じメンバーで在神インド人に愛好されている珍しいイタリ

ア料理のベジタリアン・メニューでワイワイ。ホテル・オークラ神戸泊。二月三日、メリケン波止場の大震災記念公園見学。すさまじく壊れたまま保存されている岸壁に暫し啞然。続いて兵庫県山岳連盟の誇る神戸登山研修所を訪問。森川列理事長からシン氏、コリー氏、テンジン氏はじめ有名シエルバもかつてここを訪問した旨の説明を聞く。

藤木九三翁の寄贈になる和洋書など膨大な蔵書や、屋内外の練習用人工岩壁、無線施設を見て英国山岳会より立派だとお世辞も出る。

このあと、今日は山側からだ、六甲山の中腹にあるレストランから大震災から蘇った「不死鳥神戸市」を鳥瞰、新幹線京都駅までお送りして、聖火リレーを終えた。(寺本 混)

京都の歓迎会

神戸からこられたカパディア夫妻を京都駅のホテルロビーで寺本氏に紹介され、京滋在住のヒマランクラブ会員の薬師義美氏夫人幸子さんの運転で、西陣会館と金閣寺を見学。平安神宮では神官が次々と護摩木を投げ入れる珍しい行事を眺め、節分と立春など日印の文化を語り合う。

夜は四条の烏半で、斎藤会長、酒井支部長、上尾AACK会長やヒマラン登頂者、インド関係者十五名を

迎え歓迎会。スライドを持参していただいた会場にはビデオの設備しかなく、東部カラコルムの山々を見ることができず、出席者ががっかり。秋野子弦夫妻が母堂不矩さんのインド画集をギータ夫人に贈る。カパディア氏の京都での目的の一つは薬師氏の「新版ヒマラヤ文献目録」'94を見、語ることもあった。席を移動し、話が盛り上がる楽しい時を過ごし、再会を約して散会する。

私が第一回日印合同登山隊の一員としてインドに行ってから三十年、その時のチームメート、ミナ医師とカパディア夫妻が幼友達ということが判明、また気にかかっていたカイルス峰登頂の問題(会報「山」四七七号)も話し合うことができた。半日ほどであったが、カパディア夫妻を案内できたことは幸せであった。翌四日は斎藤会長の案内で午前中京都見物、十二時発ののぞみで東京に向かわれた。(伏見紀子)

●カパディア氏の寄贈本とビデオ

○Harish Kapadia: High Himalaya Unknown Valleys [3rd Ed.], 1997
○S. Mehta & H. Kapadia: Exploring the Hidden Himalaya [2nd Revised & Updated Ed.], 1998
○Geeta Kapadia: The Himalaya in my Sketchbook, 1996

出版社はいずれもIndus Publishing (New Delhi)

○The Unknown Mountain (ボニン・トン氏と合同で行った登山のビデオ)

追悼

山と人と本と

—吉沢一郎氏を悼む—



石原 脩

平成十年一月二十六日、元副会長吉沢一郎氏(享年九十四歳)の葬儀が行われた。

多くの弔辞の中で「山と溪谷」に創刊から六十年余、七四六版に吉沢氏が寄稿し続けたことが告げられた。表記「山と人と本と」は九年十二月号の絶筆の表題である。

江戸っ子吉沢会員の登山は、大正十一年東京商大山岳部の創設と軌を一にしているが、冬季のスキー登山と未知の谷からの初登が多く、劔岳東大谷左俣「カニのハサミ」は氏の命名である。自然も豊かで、深い山

には人影もまばらだった時代である。この未知の山々を追いつめる心は海外へと拡がり、文献翻訳のかたわら多くの知人を世界中に得て、やがて、英・米・加各国の山岳会員となり、日本でも有数の山岳国際人となった。

五十七歳の時に隊長として南米アンデスに半年の踏査を行った同氏は、若い一橋大学の隊員に十一峰の初登を成功させ、また自らの永年の研究から未知のプブヤ山群を世界に紹介している。

年を経るごとに未知への憧憬を深めていった同氏は、「日本ヒンズークシユ・カラコルム会議」を発足させ、七十三歳の折には日本山岳協会のK2隊の総指揮者として、五二〇〇メートルのベースキャンプに二十日間滞在している。この頃から、ひたむきな登山者から若い人の未知の山々への案内役へと転身していった。出棺前、多くの山屋の前で、ご親族を代表して挨拶された息子さんは「まだまだ山の本を読み、原稿を書き、登らせてやりたかった」と絶句された。

私どもには、この十余年不自由だった足腰から解放されて、自由に未知の山々へと旅立っていく吉沢一郎先輩が見えるように感じられた。

(一橋大学山岳部OB会会長)

報告

REPORT
3月

科学委員会

「火山ガス災害防止」で
科学技術庁が委員会設置

昨年九月に、安達太良山沼の平で登山者四名が硫化水素で中毒死するなど、平成九年だけで火山ガスに起因する事故で九名が死亡した。一般に登山者は火山活動そのものには注目しているが、火山ガスの恐ろしさは、科学的に十分解明されていないこともあって、あまり認識されていないのが実状である。科学技術庁では、国の五研究機関を動員して、数カ月で結論を得るべく、緊急研究の委員会を一月下旬に設置した。

委員会では、火山ガスの発生・放出機構、火山ガスの拡散現象と検出技術の二つのテーマを中心に、現地実験も含めて研究を進める。そしてこの委員会では、これらの研究成果をもとに、登山者を含めた一般の方

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

に火山ガスに関しての正確な知識と危険防止対策の普及に努めることにしている。このため委員会には、行政面から環境庁が参加、登山者側からということでは日本山岳会にも委員委嘱の依頼があり、科学委員会担当理事の筆者が参加することになった。火山ガス災害防止は、火山国の日本では、安全な登山を行っていく上でなくてはならないテーマの一つである。会員の皆様もご意見があらましたら筆者へご連絡ください。

なお、最終的には、この研究成果をもとに、事故防止のためのマニュアルを作成できればと思っている。

(森 武昭)

図書管理委員会

ネパールの

新五万分之一地図を入手

このたびネパール政府によって、

新しく五万分之一の地図が一般に発売されました。これを大関保会員が早速買い求め、寄贈してくださいました。

内容は五万分之一が十四シート、二万五千分之一が四シート。ネパールの東北部、経度でいいますと東経八五度から八八度、緯度では、東経八五度付近で二八度、八八度付近で二七度一五分となっています。主な山では、西からガネッシュヒマール、ラシタシリルン、ガウリサンカル、サガルマタ、マカルーなどが含まれています。

ルムの地図庫は現在整理中で分類されていませんが、新たに一庫購入し、取り出しやすく利用しやすくなっています。登山にトレッキングにご利用ください。(飯田 進)

三水区

裏高尾・忘年山行

三水区は十二月十三日、東京・裏高尾で忘年山行を行った。参加三十人。いつもは喧騒の中を歩かされるのだが、さすがに師走とあって静かな山行を楽しんだ。

午前十時、京王電鉄・高尾山口に集合。ケーブル清滝駅を横へひよいと入ると登山口だ。稲荷山と琵琶滝

コースに分かれた。好天に恵まれ少し歩くと汗ばんでくる。穏やかな日が続く、強い風もなかったせいか、まだ紅葉が残っている。冬日は低く足下の落ち葉を照らし、ひとつひとつに影をつくっている。カサコソと音をたて、その影を崩しながら歩み、一時間半で頂上に。紅葉台で昼食とし、それぞれに過ぎた山行を振り返り、また新年の計画を語った。

高尾は、東海自然歩道の東の出発地点である。かつてと比べ、道はいぶん広くなり、また過剰と思われたい整備されていた。土砂止めの木枠が延々とつくられていて、ところどころに石畳まであった。有志十五人は相模湖まで下り、弁天島温泉で懇親を重ねた。(高橋重之)

第三百六十八回現地集会
鐘撞堂山へ新年山行

平成十年の新年初山行は一月十日、池袋に集合し、快速急行で秩父長瀬へ。まずは縁起のよい宝登山神社に初詣で。銘々今年の安全登山を祈願する。山道は一昨日の大雪で三〇センチの積雪である。境内入り口のうどん屋で昼食の後、また電車に乗り、今夜の宿泊地寄居かんぼの宿へ。十一日、天気も悪くなりそうなので、タクシーで少林寺まで行き参拝。



30cmの積雪を踏みわけて頂上へ

雪をかぶった五百羅漢の石像の様な表情を見ながら羅漢山へ。この時期には珍しい積雪で、わずか三〇〇メートルの山とは思えない銀世界である。円良田湖へ下り、いよいよ鐘撞堂山への登りとなる。関東ふれあいの林道を約一時間登り頂上へ。軽い飲み物で乾杯。手を取り合って合唱し、楽しいひとときを過ごして、大正池まで下山する。

二葉の忠七めしで打ち上げ予定なので小川町へ向かう。新年の楽しく安全な登山を約して、参加者全員料理とお茶漬の忠七めし、そして銘酒帝松を大分いただいた。あとは東上線で流れ解散。有志は池袋で再打ち上げを楽しんだことを書き加えます。参加者二十二名。(樋口公臣)

海外の山

トロワイエの「幻覚」

江本嘉伸

インターネットで、その名を検索すると、英語のほか、フランス語、ドイツ語で華麗な経歴が表示される。しかし、圧倒的に、パートナーであるエアハルト・ロレタンの項目のほがが多いのは、八千メートル峰十四座に登った三人目の登山家の「強み」だろう。

ジャン・トロワイエ。三月十日で五十歳になるスイスの山岳ガイド。無酸素、超軽量の「身軽な」登攀スタイルに徹して高峰登山を続けているユニークな登山家だ。一九八五年冬には、ダウラギリ東壁を冬季としては初のアルパイン・スタイルで登り、八六年、ロレタンとともにチョモランマ北壁を三十九時間で登り、急な雪面はほとんど「尻セード」状態で三時間半で下った驚異的なスピードは、今も語り草だ。

そのトロワイエが、日山協の招きで来日し、二月二十一日、八王子の海外登山研究会で講演した。二基の

プロジェクターと素晴らしい音楽を配してのスライド映写、チョモランマからスノーボード滑降に挑戦した(頂上にはたどり着けなかった)昨年のビデオ画像が参会者を虜にしたが、話がまた面白かった。

チョモランマのてっぺんに横たわって一時間半もいたことなど、山を楽しむ、味わう彼独特の、ユーモアで味つけされた思考方法がまず新鮮だった。その哲学の前には「幻覚」すら、楽しみのひとつになる、と聞いて会場が動いた。

困難な壁の登攀を終えて下降中、いつの間にかパートナーが一人ふえていたりする。はじまったな、と思いつつもその「幻」と会話を交わしたり、どこからか流れてくる音楽を聴いたり。「人々のいるベースキャンプの手前三十分くらいのところだ」とも。

幻覚を友とする、なんていかにもトロワイエらしい物言いだったが、他の登山家たちとともに、パネラーとして出席していた浅野勝己・筑波大教授(運動生理学)は、疑問を呈した。「それは、既に高度障害の表れではないか」

八千メートル峰での無酸素登山は、事故率が高く、特に「記録力障害」

の訴えが多い、というのが浅野がこれまで懸念して主張してきたことである。その意味で、無酸素アルパイン・スタイルの無理を、参会者たちに向けて浅野は言いたかったのであらう。

高所には長くいないで一刻も早く下に降りることが安全につながる、ともバワフルなこの登山家は言ったが、疲労困憊した「普通の登山家」には、下降を急ぐこと自体危険でもある。

ただ、トロワイエの精神の根元には、ヨーロッパ人が大事にしてきたユーモアの心と、自然をありのまま楽しみたい、という強い欲求があるのだと思う。それは、登山に限らない。ヨットで大洋をめぐる、カヌーで川を下り、ラクダで砂漠を横断し、六〇メートルの深さまで海洋ダイビングを楽しむこの男は、いまモンゴルの草原騎馬行を夢見ている。

研究会を終えて、トロワイエは、アテンド役を引き受けた戸高雅史ら若手登山家たちと、富士山に登った。筆者も同行させてもらって話の続きを聞きながら、自分の生を自然の中に設定し、自在に楽しもう、としている人間、との印象を強くした。

登山姿勢を知るためには、山以外に何をやっているか、がカギだ。



37人の大所帯で大ゾレ山へ登る

岐阜支部

大ゾレ山・秋季懇親山行

JAC
支部だより全国各地の支部から 独自の活動状況を
レポートします

昨秋十一月十五日、木曾御嶽の麓、飛騨小坂湯屋温泉のニコニコ荘へ岐阜勢のほかに、東京、京都、兵庫、長野、石川、愛知などから会員、会友合わせて二十五人が集まった。にぎやかに飲んで、歌い、山のおしゃべりをして、懇親を深めた。

十六日、数日ぐづついていた天候も晴れ上がり、よい天気に恵まれた。大ゾレ山(一三六六メートル)は、三角錐型の美しい山で、地元の人たちは小坂富士と呼んで親しんでいる。しかし、この山には登山道はなく藪山である。当日参加会員合わせて三十七人となり、今回の登山はにぎやかになりそうだと。

七時四十分、車に分乗して宿を出発した。小黒川沿いの林道を約六キロ走り、ガードレール手前で車を止め、身支度して登りはじめた。小黒川を横切り上アシ谷へ入る。谷沿いを登るが、倒木、浮き石が多くて滑りやすく、気をつけて登った。

一時間三十分ほど登った地点で一息入れて谷水で喉を潤し、小尾根に取りついた。ここがまた、ずり落ちるような急登である。笹につかまり体を引き上げながら登った。

笹藪がひどくなってきたので鉈隊の出番である。頼もしい五、六人の男性軍がどんだん藪を切り払ってくれるので、後からついて登る者は楽

であった。小枝などでかすり傷をつけながらの前進である。でも「へいき、平気」、奮闘すること一時間十五分。十一時二十分、とうとう全員が頂上に立った。

森本市郎会員の音頭で「大ゾレ山万歳」を三唱。続いて、京都から参加いただいた最高齢者の伊藤潤治さん(八十四歳)の音頭で「乾杯」。高木崎男支部長を中心に円座になり昼食。八十四歳の高齢で、こんな藪山へ平然と登られる伊藤さんをまづは皆でほめたたえ、私たちもあやかりたいと願うなど、寒さを感じないポカポカ陽気に、時のたつのも忘れて四方山話をしていううちに下山時刻となった。

最後に「ロングロングアゴー」を全員で合唱し、下山の途についた。十五時、車止めに帰着し、また逢える日を楽しみに散会、それぞれ家路についた。
(藤田純江)

宮崎支部

国見山の名に恥じない眺望

■雪シャワーのお祓い

一月二十五日(日)、定例山行は西都市・西米良村界の国見山(一〇三六メートル)。神が選んでくれた好日、山脈の雪化粧を眺め、真っ青な空に

向かって口笛を吹く気分には浸りながら国道二一九号、一つ瀬川沿いを遡行する。十時二十分、児原稲荷神社の神木から落下するスノーシャワーのお祓いを受けて登山道に入る。標高約四五〇メートルあたりから積雪は徐々にその厚みを増し、サック・キュッと響く靴音も軽快なリズムから次第に鈍重さを加え、足の上下動が緩慢になってくる。休憩中にジャンパーを脱ぎリュックに詰め込む。高度を稼ぐほどに息切れの雑音が交錯する。人工のスギ・ヒノキ林やカシ・マツ・ヒメシヤラなどの二次林も雪の法衣をまとい、綿帽子を微風で揺すりながら一行に洗礼を繰り返す。

■雪漬けの五時間二十五分

スタートから二時間三十分、山頂はまだ見えぬ。稜線の斜面を避けて雑木林に入ること二十分、積雪二〇センチの急斜面に遭遇するが、樹間に稜線が見えてくる。よし、ここから直登だと意気込む。ここが正念場、リーダーたちの櫓が飛ぶ。手足に疲労感が走る。二次林に助けられ這いつくばってよじ登る。登山開始から三時間二十分。ついに爽快・感動の瞬間を味わう山頂に立つ。

缶ビールを分かち感動の乾杯、快感の雫が喉を過ぎていく。参加者全員の呼吸が一致する瞬間でもある。

三六〇度の展望に満足の笑みがこぼれる。透明な空間に米良三山・尾鈴・式部・掃部・地藏岳などは指呼の間である。また東面に広がる太平洋はもちろん宮崎平野・古事記の阿波岐原やシーガイアのホテルなど遠望でき、まさに山名通りの眺望が楽しめた。遅くなった昼食を頬張りながら二月定例山行の地藏岳の山容を心に焼きつける。

冬山のセオリー、日没一時間前までは下山完了への思いは皆同じだ。清らかな山脈に思いを馳せながら急斜面では滑り、転がりを繰り返しながら予定時間内の午後四時五分に神社に到着。五時間二十五分の雪漬けであった。

(井野元 繁)

静岡支部

熊伏山懇親山行

静岡支部恒例の秋季懇親山行が、平成九年十一月八、九日、一泊二日の予定で開催された。

八日の宿泊場所は、かつて「紅葉会」でも利用したことのある、徳川家康と縁のある静岡県西北端の磐田郡水窪町の山住神社の社務所で、十七時までに三々五々集合した。静岡・長野県境の平森山・朝日山行組は神社の風呂で汗を流していた。

十七時三十分から開かれた懇親会

は大石支部長の挨拶の後、牧野衛名誉会員の乾杯で、用意してきた料理や差し入れの銘酒を囲んで、大いに飲み、語り合った。飲み足りないグループは場所を二階の部屋に移し、夜半まで飲み続けた。

翌九日は朝食後、山住神社に詣でて御札をいただき、全員で記念撮影の後出発。足神神社に参拝して大切な足の健全なことを祈り、青崩峠登山口に向かう。

峠は長野県との県境で、北に遠山川の深い谷が望め、左手には青崩れといわれるように、青みがかった大きな崩れが迫っている。熊伏山への取り付きは今では階段状に、しかも手すりまでつけられているが、少し登っていくと、木の根や枝に頼らざるを得ない急な登りがずっと続く。ちょうど紅葉も見頃で天気もよく、のんびりと歩く。しんがりは最高齢九十一歳の牧野衛名誉会員に、サポート役の水野が付き添い三時間を要して、待っていたみんなに拍手で迎えられながら一等三角点熊伏山頂上に到着した。

頂上は東側に展望が開け、南アの高峰から前衛の山々をはじめ、天竜川沿いの山すべてを心ゆくまで眺めることができた。快晴の一日、錦秋の山を満喫しながら往路を下り、流れ解散で帰宅した。

(水野公男)

平成十年新年会



新年会は賑やかに酒豪ふりを発揮して

静岡支部恒例の新年宴会は、平成十年一月十五日静岡市鷹匠会館で十七時から開催された。

今日は成人の日だというのに、朝から強い風雨で山間部や県東部は雪に変わり、静岡市井川からの会員は、富士見峠が先日の残雪に今日の積雪も加わり、四五センチにもなって欠席せざるを得なくなった。

定刻を十分ほど過ぎた十七時十分、水野が状況説明を行い、開会となる。大石支部長の新年の挨拶の中で、静岡支部の創立五十年が二年後の西暦二〇〇〇年に当たることを説明。

引き続き牧野衛名誉会員の音頭で乾杯し、懇親に移る。

今回は毎月の例会に出席できない会員や新入会員のために全員に自己紹介をしてもらったところ、近くにも顔が知らなかった者同志の交流もでき、喜ばれた。なお西川信義会員の手品披露は大受けし、祝儀として差し入れられた銘酒十本がアツという間に空になってしまい、酒豪ぶりはいささかも衰えていなかった。

瞬く間に三時間の時間が過ぎ、最後に記念撮影の後お開きとなり、二次会へと散って行く組もあった。

(水野公男)

ネパールへようこそ

1998年はネパール観光年です。

【ネパール観光年スペシャル企画】

ゴールデンウィーク●4/26日～5/4(月・休) 9日間

ネパール・カトマンズ行特別運行便(名古屋発着)

ヒマラヤ越えフライトが魅力 エベレスト、カンチ、マカルー展望

●トレッキング中心の全6コース ●好評受付中



運輸大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員

アルパインエアサービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911

大阪☎06(444)3033 名古屋☎052(581)3211 福岡☎092(715)1557

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします)



イラスト 野田四郎

『空へ—エベレストの悲劇はなぜ起きたか』を読んで

名越礼子

エベレストへの密かな思いを秘めて、難波さんはしばしば奥多摩の山にトレーニングに行っていた。そんなある日、蕎麦粒山にご一緒したが、頂上付近に犬がいて、皆が怖がって頂上を迂回してしまった。後で、世界の山を目指す人が、犬が怖いなんて、と言って、皆で笑いあった。ひかえめで優しいが、目的に向かってしっかりと前進している、という印象だった。

この九六年のエベレストの悲劇は、哀れ、というのが、読後のまず最初の感想だ。この臨場感あふれる文章から、次を感じたのは、人の願望、野心、結局は欲と心と理性とのきわ

どい緊張関係が、完全に崩れ去っていく、薄い空気の中の、想像もつかない修羅場の空想図だった。果敢な精神と危険の回避との矛盾は、登山をする人ならたいてい感じていて、何とか折り合いをつけているのだと思うが、果たして高所では……。

山の修行を積み、場数を踏んで、実力をつけ、いよいよヒマラヤの高山へ、そして隊を組みさまざまな苦勞を乗り越えて自力で頂上を目指す、という古典的な登り方ではなく、ここでは営業の隊が、たとえ修行も場数も実力も不足の人でも、頂上までお連れします、というわけだ。それならエベレストに連れて行ってもらおう、という欲望が起きるのも無理はない。そして頂上に近づけば、登頂したいという欲望も起きる。連れていくほうはできるだけ多くの顧客を登頂させて、営業成績を上げたい

という欲望がある。これらの欲望にたいして、でも決して無理はしない、という理性が下界ではある。

何がどうなっている、その理性が作動しなかったのか、このような高所に縁のない私にはわからないが、ここでの悲劇には、営業ということがおおいに関係するように思われる。

事故の後、田部井さんが、難波さんは八千メートルの前に七千メートルの山を登っておいたらよかったのでは、とコメントしておられたと思うが、控え目だけれど、この言葉は重要なんだと、改めて感じる。

上高地インタープリターの四年

大森弘一郎

上高地でのインタープリター(自然の声の翻訳者=自然解説)を始めて四年が経ちました。

山の自然学講座(注)で今まで登山の通過点だった上高地の価値を改めて教えられ、山研のある上高地なのだから、ここで自然解説をする役割があるのでは、となったのが一九九四年のことです。

当時山研委員会の理事だった溝口洋三さんからの、公益法人のJACCなのだから、地元迷惑をかけない

範囲でならやろうや、との応援も効きました。

それから四年間、活動を目的とする「やま学研」も生まれ、その活動の一つとして毎夏続けてきました。

工夫を重ね体験を積み、自信もついてきたようです。ただアンケートでは好評ですが、実は苦勞、失敗、問題もあるのです。

一番難しいのが、解説する相手を見つけること。次は押し売りにならない解説。仕入れたばかりの知識での解説はついやり過ぎるのです。自然からの感動を盛り上げるという課題は実に難しいのです。

はじめは地元への遠慮もあり、山研に宿泊する人を対象に計画しました。ところが山研泊の方々ほとんどご自分の計画を持っておられるため、せっかくの休養時間に余計なことをしないでくれ、ということになります。また静かに山研を一人で楽しもうとしている人にとっては、インタープリターや連れてきた非会員(山研の収入に寄与する)がいることすら邪魔になります。

また資料室の片隅でやるミニ講演会は、泊まっている方には余計な催しになる場合があるのです。

梓川の岸辺に望遠鏡を据え、一般の観光客に山を見てもらい、そこに置いたパネルで説明をする、穂高の

自然の成り立ちや自然保護の話はすごく好評です。この活動に資金で協力したいという方も現れるため、地球環境基金の募金箱を置くことにしました。これはそっくりJACの名で基金に寄付するのですが、このような行為を好まない会員も中にはおられます。

これらのことは、日本山岳会は仲間のクラブだと考えるか、公益のための法人だと考えるか、山研についても会員だけの山研だと考えるか、一般サービスもする場だとするかの基本問題です。この両面ある中で、私は発展する会として、活動を広げることで役立とうと行動しているのですが、会員皆様の合意を得たいものです。

初年度(九四)は、八月の一カ月間をほぼ二人で詰めて一日六十人、二年目(九五)は九十人、三年目(九六)はさらに夜「上高地夕べの会」と称するミニ講演会を山研と上高地温泉ホテルで交互に行ってみました。ホテルでは参加者が多くて好評、山研にも夜道を歩いてきてくださる方があり、感激したものです。

温泉ホテルでは清水屋のお客さんも含めて毎回三十名ほど。七時半から九時過ぎまで、青柳社長も喜ぶ盛況でしたが、終わってから資料を抱えてトボトボと帰る道は、まさに売

れない温泉芸者そのものです。門限までに帰るのが至難の業でした。

昨年は、常駐を止めて週末を挟んだ四日ほどを四回やりました。「上高地夕べの会」は山研とホテルと二カ所同時進行。そして山研が使えなかったある週末に一つの試みをしてみました。

上高地温泉ホテルに泊まり、昼の案内の計画を、帝国ホテル、清水屋、温泉ホテルに張り出し、希望者をホテルのフロントで受け付けてもらったのです。これは希望者殺到で解説員が悲鳴を上げる有様。これで昼も夜も解説の相手を得る悩みだけは完全に解決しました。

今年はこの方法で一カ月行いう予定です。これはよいことづくめなのですが、一っだけ山研があるのになぜホテルをBCにするのかという疑問が残ります。

昼の案内コースは上高地温泉ホテル前集合で、近いのは①田代池方面、遠いのは④明神方面の倒木更新地から建設省の破壊現場まで、や⑤横尾方面の網状流からモレーンまで、先ず五種類ぐらいが考えられます。

皆それぞれ工夫した七つ道具を持っています。バーナーとコーヒーを必需品とする者もいますが、私の場合はウイスキーのポケットビンにウィロン茶を入れた水筒(先ずは好評)、

磁石と高度計(地図の判読法)、偏向フィルター(岩魚発見用)、傾斜計と巻尺(地形を書いたり、木の高さを測る)、河原で拾った石(穂高の成り立ちを説明するのに便利)、輪郭だけを描いた高山植物の図集と二十四色の色鉛筆(発見した植物に色を塗ってもらう)。

「上高地夕べの会」では、上高地の生い立ちや、この自然の面白さや、穂高を数万年昔にタイムスリップさせてみたり。

今年の夏はどのようなことになるでしょうか、どうかご参加ください。そしてご意見をいただきたく存じます。

●(注)山の自然の成り立ちを通して自然の価値を座学と現地で学び、自然保護の活動に生かそうとする講座、年に約二十回、一般にも公開していますが、JAC会員の皆様にもぜひご参加いただきたいと思います。

(希望者には計画表をお送りします)
RAX・〇四五―八三三―八五〇五 大森まで)

理事黒田孝雄氏との山行

川崎精雄

メモを見ると私は昭和五年の春に、仲間三名と丹沢主脈縦走をしている。当時東京方面の人たちの丹沢縦走の

多くは、中央線と瀬駅(今の相模湖駅)から歩いて、津久井青野原の居住屋が鳥屋の春木屋に一泊し、翌日縦走して小田急沢沢に出るのが多かった。ついではながら小田原急行電気鉄道が開通したのは昭和十五年頃と記憶する。一時間ごとに客車一台が走っていた。東京方面では小田原電鉄と呼んでいたが、神奈川県の沿線一帯では最初から小田急と呼んでいた。結局後日それが社名となった。

私は居住屋は二度目だったが、蚤の多いのに閉口した。夜少し遅くなって、勤め先から直行の黒田孝雄さんが到着された。

翌朝、黒田さんと一緒に五人で宿を出た。黒田さんの服装は黄を帯びた草色の上下服と帽子、ステッキという当時の社会人登山家らしいスタイルだった。焼山の裾にはツツジが咲き、武蔵野の向こうに筑波山が見えた。この上ない快晴だった。蛭ヶ岳の山頂には石仏が二、三体あり、その仏を膝に乗せて写真を撮った。熊木沢では筒鳥が鳴いた。大滝沢の上部には残雪が豊富だったので、そこまで下って雪をたらふく食べた。丹沢山にも塔ヶ岳にも小屋は無かった。

黒田さんは日本山岳会の理事で、私たちに手の届かない地位におられたのに、全く偉ぶったところがなく、



イラスト 宇都木慎一

短歌

山小屋にて

大橋克也

山林にやがては朽ちむ空^{からい}のまだ勁^き
き棘上向きしまま

シナノキが幹ごと曲り径覆う風に從
うみちのくの木は

シナノキが幹ごと谷に曲りいてそを
這いながら潜る山人

雪の小屋独り寝れば深海に魚果つ
ることわが骨の鳴る

窓叩くは雪の声なり野狐が扉^とをゆす
るがに寒さ酷しく

音の無き雪の夜目覚め音をきく微か
に響く鐘の幻聴

しんしんとタンネの森に夢積らせ
シュプール消しゆく彼の日呼びたく

全行程を通じて私たちを対等に扱ってくださった。おかげで私たちはのびのびとこの縦走を楽しむことができた。実に穏やかな方だった。

右の山行以外に黒田さんとは、三ツ峠―本社ヶ丸―笹子の一回があった。その頃黒田さんから一通の封書を頂戴した。開いてみると文面は無く日本山岳会の入会申込書で、紹介者欄に黒田さんの署名捺印が既にあって、私が申し込みの署名捺印をするだけにしてくださった。この上なく有り難くご好身に沁みましたが、その頃私の山登りの方向もあまり明瞭でなかったので時期尚早の気がして、考えた末せつかくのご好意に甘えずにしまった。返す返すも申し訳なく思う。

黒田さんは昭和二十年南方の島で戦病死されている。謹んでご冥福を祈る次第である。

翔ぶ和蘭人異聞
各務氏と横・松方両氏を結ぶ縁

関塚貞亨

山岳第九二年の巻頭二番目に「登山史上の人・各務良幸」と題する田口二郎さんの優れた追悼記(談話)が載っている。

各務さんは一九二四年にケンブリ

次代に残そう美しい山と溪

ッジに入学し、スキー部に入り、アーノルド・ランの指導のもとミューレン、ヴェンゲンなどでスキーに熱中したほか、スマイスと知り合い、アルプスの難しいルートや壁に挑んだ。足も速く、ダンデランからマッターホルンまで短時間で縦走し、その当時、健脚で有名だったフライング・ダッチ(マン)とあだ名された和蘭人V氏にちなんでフライング・ジャパニーズと呼ばれた。

各務さんがアルプスで活躍したのは横さんの少し後、松方さんと同時代であるが、横さん、松方さんがアルプスを登りながら、いつも日本の登山界に貢献したい、と考えていたのに、各務さんはエトランジェだった。田口さんは「横さん、松方さんはコインの表側、各務さんは裏側にいた」という。

また、田口さんは「日本の登山史にはマナスル以後、芳野満彦から長谷川恒男にいたるアルプスの難壁に挑んだ時代があった」という。かつて難壁に挑むエクストリーム・アルピニズム(極限登山)という概念があった。大正末期から昭和初めにアルプスで活躍した各務さんを、「彼

ら日本の極限登山の祖だ」と位置づけている。『東西登山史考』の著者の牙えに、改めて感服するばかりである。

私は、各務さんと麻生武治さんの共著『山岳大観』(一九三一年発行)にサインをいただいたこと、郵船ビルのホールで二度ほどご挨拶したくらの浅い縁であったが、南川、絹川両氏の驥尾にふして、田口邸に伺い、よく整理されたお話と登山史観に感銘を受けて貴重な経験をしたと考えている。田口さんは最初に各務さんの名は松方さんあたりから聞いたのではないかと、言われたので、久しぶりに築地書館の松方三郎エッセー集「アルプスと人」を読んだところ、横さんも松方さんも、フライング・ダッチマンに偶然にあつており、それぞれの著作に印象深い文章を残しているのが、驚くとともに、横・松方、各務三氏の間に因縁めいたものを面白く感じた。

横さんの名著『山行』の一八ページ、場所はヴェッターホルンのグレックシュタイン小屋でのことだ。現代版名遣いで引用すると

「先着の人がいる。スイス山岳会の

章をつけている。額の広い—むしろ額が顔面で眼鼻はその下に間借りでもしているような容貌の所有者—彼はボケットに両手を突っ込んだまま右に左にサッサッと歩き廻る。彼の祖国の歌でもあろうか、真に美しい透き通るような声で低調に口ずさんでいる。そして時々額をあげて、こちらを見ながらニッコリとする—彼はオランダの人とか—と書いているが、榎さんはその西洋補助のようなひとが誰かには触れていない。その正体を明らかにするのは松方さんで、エッセイ『山であった登山家』に書いている。松方さんは、その人は健脚で知られたV氏で、ワグナーのオペラにちなんでフリーゲンデル・ホールンデルと呼ばれていたという。榎さんはV氏からニッコリされたが、松方さんは逆鱗に触れたと書いているのが面白い。

それはツムツトからマッターホルンに出かけようという朝、といっても夜中の一時前のことだ。暗闇で誰だかわからない。山ランプをつけて小屋を出る時に、何の気なしに「では頂上でお目にかかりましょう」とひとこと言ったのが悪かった。この小僧が何をいうかと思ったのである。雪尾根からツムツトの鼻の直下の三本槍にかかった頃、後から追いついたV氏の隊はすさまじい勢いであつという間に追い越していった。こっちは相手がアルプスきっての早がけとは知らないから天下泰平のものであったが、私たちでも七時間四十分で八時には頂上に着いていたのだから、V氏はツムツトの記録を作ったことだろう。とにかく夕方ツムツト村に帰ってみると村の山案内連中はみんなこの事件を知っていて、「フリーゲンデル・ホールンデル憤然としてツムツトを飛ばす」ひとくぐりかちゃんと一つの物語になっていたのには呆れた、と書いている。

榎さんも松方さんもV氏を懐かしく親しみをもって書いており、オランダ人V氏を仲立ちとして、コインの表側の榎さん、松方さんと、コインの裏側の榎さん、松方さんと同じように健脚をうたわれ、あだ名をつけられた各務さんをつなぐ不思議な縁を感じたのは私だけだろうか。

外国人登山者のこと

石田稔郎

会報六三〇号に柴田篤志氏が「外国人登山者について」報告と提案をされていますが、私も三、四年前に穂高岳周辺の登山コースにおける外国人登山者のマナーの悪さについて会報(五八四号)に投稿したことが

あります。

北アの冬期小屋荒しを契機として、当時の藤平会長、大森理事のご努力により「外国人登山者への注意喚起のパンフ」が作成され、山小屋に配布されました。私は長野県警の洞沢常駐隊と穂高岳山荘に置いてあるのを確認しました。

柴田氏が書かれているように「目立たない」とまではいえません。しかし、「現地の旅行代理店、空港のカウンター、機内など」でマナーを呼びかけても効果はないと思います。それは次の理由です。

韓国の首都ソウルの近郊に北漢山という連峰があり、国立公園になっています。休日になると、市内ばかりでなく、各地からハイカーが押し寄せてきます。牛耳洞からハルジェ、仁寿峰、白雲台のコースはとくに混雑しますが、白雲山荘直下の沢を登るコースは、上からも下からも、我勝ちに登下降し、祭日になると、さらにひどくなり、狭い岩場のルートに殺到するので、上から人が降ってくるほどです。

北部の雪岳山の蔚山岩は観光コースになっていますが、初夏のころ、修学旅行の中高生が集団で、頂上へ行く狭い鉄製の階段を、下降してくる人を物ともせずに登って行くのを見たことがあります。今にも、落ち

て怪我をする人が出るのではないかと考えたものです。また、引率の教員は全く注意も指導もしないように見えました。

登山のマナーを知らない人たちが、二泊三日で穂高岳に登るツアーでやってくるので、柴田氏が目撃された危険な登り方をしているのだと思います。危険な行爲を見たら、遠慮なく、英語でストップをかけ、少し待って(韓国語ではチャムカンマン・キダリセヨ)と指導すればわかってくれるでしょう。日本国内の山で、日本人が指導するのですから。

会員の皆さんが、穏やかに、積極的に対処されることを望むものです。

コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。

重量78g.
つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600
実色メタリック ￥18,000 消費税別
カタログ代無料、電話、FAX、来書でどうぞ
〒177 東京都板橋区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3928-5411 FAX 03-3928-5411

株式会社 石神井計器製作所

図書紹介



★紹介図書は全て税別価格です

藤田弘基・著

『エベレスト花街道を行く』

四月下旬から咲き始めるロドデンドロン(シヤクナゲ)の仲間たち、そして草木類ではサクラソウの仲間や、いきなり地面から花を咲かせるアヤメ科の花々がヒマラヤの花の季節のスタート。色とりどり、そして姿形も様々に咲く高原のお花畑はさぞや見事なことだろう。日本に咲く高山植物の仲間も数多いが、残念なことに花の名前がわからない。

この本には百三十九種の花が写真とともに紹介されている。コンパクトなのでトレッキングに携行してもかさ張らず、旅の友には最適だ。

カラー写真の後は花のトレッキングの五コースが紹介されており、どのコースでは何の花が見られるのか、見たい花によってのコース選択

も可能である。花の名前はなかなか覚えにくい、繰り返し見て、科ごとの名前に馴染んでゆくのがよいかもしれない。メコノプシス・ホリデユラ(ケシ科)、あの憧れの「青いケシ」の名前である。(渡邊玉枝)

一九九七年七月 講談社発行
一九九七年七月 千六百円

石間信夫・著

『孤高の先蹤者 八十歳現役で死す』

本書は文字通り孤高の登山者、静岡の石間信夫氏の遺稿集である。

石間氏は特異な登山者、その故に話題の多い人であった。輝かしい登山の記録、生涯山行回数実に二千六百四十六回、千六百二十一峰を踏破している。そして奇行? 阿部奥の精通者、ヤブの石間、マスクメロンと呼んだ踏破の地図上の朱線、生前葬、膨大な記録……どれをとっても目を見張る。

石間氏はまさに常人にはつかみがない。その人間像にこの遺稿集は踏み入ろうとしているのだろうか。

第一章、随筆、論説の中にその片鱗を垣間見る。限らない山への愛情、真の野人、強烈な個性がその行間に漂っている。

第二章、山行、二十二編はその石

間流登山の真髄に触れることができ。『最後まで諦めず、必ず朝がくる』の精神こそ岳人の本領だ。

いのしが道を尋ねに来る人、と山仲間が言った。神話、そんな人が石間信夫氏だ。(小倉 厚)

一九九七年八月発行 永野敏夫編
二六四ページ 千八百円 A5判
申込・JAC事務局

日本山岳会

マカルー登山隊一九九五・編

『マカルー東稜 報告書』

重廣隊長は出発の挨拶で「それぞれの隊員が、それぞれのマカルーを目指して登って参ります」と言っている。本文は、マカルー登山を終えて振り返ったそれぞれのマカルーで各隊員のすべてがそれぞれのマカルーを体験し、自己の目標達成にぶつかった感慨が感じられる。とくに若い隊員に、次なる目標を持つ原動力となっていることが素晴らしく、この登山隊の目的は十分に達成されたと思われる。

大遠征の登山隊の報告書であるが、A4判二二七ページの中に、非常にコンパクトにまとめられている。また、マカルーにおける環境保全と題して、重廣隊長が二ページにわたってテイクイン・テイクアウトの理念

を持つてのゴミ処理計画とその結果を書いている。今後の登山にとって最も重要な点であろう。(茂見 猛)

岡島成行・著

『林野庁解体論』

書名はショッキングだが、言っていることは穏当である。「林野庁という役所はもういらぬ」と言っているのではない。崩壊に瀕しつつある日本の森林を救うために、林野庁の組織を思い切って変える必要がある、と言っているのだ。そして、そのために必要な方策を具体的に提言している。

第一章「日本の森林は死に瀕している」では日本の森林・林業の現状をあげ、第二章では「林野行政の歴史をひもとく」つつ、なぜ、このような事態になってしまったかを説いている。第三章では「林野庁解体へのシナリオ」として国土保全省の設置を提唱している。第四章では「日本の森と林業再生のための処方箋」として、「過疎問題」に触れているが、「大人も子どもも山村に生まれ」と「自然学校」を提唱している。日本の自然・森林を守るために、何をなすべきかを考えさせてくれる本であ

る。(伊藤 敏)

一九九七年八月 洋泉社発行 二
〇五ページ A5判 千六百元

札幌山岳会・編

『貢嘎山』

日本にとって悲運の山、横断山脈の盟主、貢嘎山(ミニヤ・コンガ)がようやく登られた。北海道の岳人にとっては十六年にわたる長い道程だったろう。一九三二年のアメリカ隊による初登から数えて第六登になり、すべて北西稜経由であるが、日本隊にとっては初めての成功である。

本書は一九九七年の札幌山岳会によるその快挙の報告書である。構成は記録、資料、随想、寄稿の四部からなり、一〇〇ページにまとめられている。五一葉のカラー写真が美しい。周辺の写真が少ない山群だけに、資料的価値は高い。執筆者は全員参加型で幅広く、それぞれがかかわった切り口で生き生きと語られている。一つ注文をつけるとすれば、この地方の探査の歴史、風土と地政的な変遷についての記述や、貢嘎山の今後の登攀ルートについての考察を盛り込んでいただけたら、より一層生彩のあるリポートになっていたと思う。

一九九七年十二月 札幌山岳会発
(中村 保)

行 一〇〇ページ

児玉茂・著

『多雨林と火山』 インドネシアの自然と人々

近年、わが国の登山者の活動領域は著しく広がり、地球上の至る所で日本人の姿を見かけるようになった。しかしほとんどはただ山に登って降りてくるだけで、その地域の自然や人々の生活にまで関心を持つ人は少ない。著者はカラコルムやアンデスなど世界各地の山に登った登山家だが、マレー半島の森林を歩いていた時、このことに気づき、山に登るだけでなく、「地域をきちんと記述しよう」と考えるようになったという。

本書にはいいお手本があった。ウエストンの『日本アルプス 登山と探検』である。周知のように、あの本では登山中の行動についての記述はむしろ少なく、土地ごとの風俗や人文地理に記述の中心がある。著者が目指したのもこの方向であった。本書の記述にもウエストンを彷彿とさせるようなところが少なくない。著者は住民と意思を疎通させるために、まずインドネシア語の勉強から始めた。そして現地に長期に滞在しつつ、時に山に登るという方法をとった。また自然については、あら

はじめ文献でそれまでの研究を調べ、記載に生かした。そのため記述が正確で、火山や植生などの研究者にも役に立つデータが随所に見られる。

地図がきちんと付けられているのも理解を助けることにつながっている。

インドネシアの自然については、ウオーレスの『マレー諸島』がよく知られているが、本書は将来、山岳書として、また自然史、地理の書物として高い評価を受けるようになるに違いない。

一九九七年八月 古今書院発行
四七一ページ 九千五百円
(小泉武栄)

斎藤重一・著

『鳥海山』

著者は象潟町に生まれ、鳥海山に五百回以上登頂しているという。終生の思い入れの山域を持つ幸せな人である。その六十年にわたる思い出と打ち込みぶりを集大成したもので、修験道、自然誌、登山史など著者の体験と見聞を語っている。なかでも「ブナ」と自然保護活動については登山家と教育者の視点から熱心に書かれている。

私のような鳥海山好きにとっては大いに楽しめる事典の一冊であるが、本書はもっぱら羽後側の鳥海山について述べており、「秋田県の鳥海山」

である。山容だけ見ても羽後側と庄内側とは対照的であり、深く広い山域を秋田側の事象だけを詳述しても片手落ちというものだ。しかし、著者は山形側は庄内の人たちの手によって紹介されるべきだと語るほどの羽後鳥海に打ち込みの人なのである。

一九九七年四月 なんば書房発行
三六九ページ 三千円
(松沢節夫)

日本山岳会石川支部・編

『肇』創立五十周年記念号

本書は石川支部という名の、地方の一山岳会の五十年の歩みの記録である。昭和二十二年第二回国体が石川県で開かれ、登山がオープン競技ながら採用された際、その運営団体として石川支部が急遽結成された。詳細は本書中にもあるので省くが、このために戦後の混乱期に一步抜け出し、地方岳界でリーダー的役割を果たしたものと考えられる。

内容は前半を会員の随想など、後半を五十年間の会の記録集とし、さらに記録集と対比させて同年代の外部のトピックスを併記。外部の流行に逆らいながらも、「井の中の蛙」になりがちな地方山岳会に外の空気を採り入れようとしているのが読める。編集にあたり、会の存続には運

営や記録、事務局などの地道な傍役が重要だと痛感した。(津田文夫)

一九九七年十月 石川支部発行
A5判 二〇八ページ 頒価二千
円(送料込み) 石川支部事務局へ

田淵行男記念館・編

『岡田紅陽・田淵行男の世界』

山岳写真界の巨匠として知られる二人を同時に取り上げた本である。

この写真集、実は昨夏、安曇野の田淵行男記念館で開催された企画展の図録である。図録とはいえ収録された写真はもとより、解説、年譜など、たいそう充実している。

まず、岡田紅陽が遺した端正かつ雄大な富士の作品と、山岳を取り巻く自然の営みを追いつけた田淵行男の作品とが、対比的に展開する。両極端ともいえる二人の存在こそが、日本の山岳文化の層の厚みである。

片や日本人の精神的支柱としての富士に心情を込め、片やナチュラリストとして自然への愛をカメラに託したとする平木収の「比較山岳写真文化論」的解説、また山岳写真の系譜の中で両者の独自性を説く財津達弥の解説、ともに明快で説得力がある。

(峰谷 緑)

一九九七年 田淵行男記念館 友
の会発行 七七ページ

図書受入報告(1998年1月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
石井光造	静かな山60:マイペース登山ガイド	260pp/19cm	白山書房	1997	出版社寄贈
八代竜也	岐阜の山歩きベスト55コース	138pp/22cm	風媒社	1997	出版社寄贈
札幌山岳会(編)	1997貢嘎山:ミニヤ・コンガ7,556m北西稜登攀の記録	100pp/26cm	札幌山岳会	1997	発行者寄贈
廣瀬誠	越中の文学と風土	460pp/22cm	桂書房	1998	著者寄贈
川見博美	雪の尾根読書の山	348pp/26cm	川見博美(私家版)	1997	著者寄贈
廣川健太郎(編)	アイスクライミング・全国版(クライミング・ガイドブックス)	324pp/19cm	白山書房	1997	出版社寄贈
権藤信子	鳥の組曲(詩集)	96pp/22cm	道程社	1997	著者寄贈
串田孫一 他(共編)	阿蘇山(日本の名山 第20巻)	253pp/20cm	博品社	1998	出版社寄贈
ナンセン(著) 太田昌秀(訳)	フラム号:北極海横断記-北の果て-	418pp/30cm	ニュートンプレス	1998	勝山康雄氏寄贈
中田修	南極のスコット(センチュリーブックス No.147)	233pp/20cm	清水書院	1998	著者寄贈
森下博三	氷層の山	197pp/20cm	新樹社	1997	木下是雄氏寄贈
石田喜八	山の楽想(詩集)	221pp/22cm	石田喜八(私家版)	1997	著者寄贈
水越武(写真)小野有五(解説)	水越武写真集 森林列島	198pp/23cm	岩波書店	1998	著者寄贈
日本ヒマラヤ協会(編)	東部カラコルム	103pp/26cm	日本ヒマラヤ協会	1994	発行者寄贈
小泉武栄	山の自然学(岩波新書 541)	232pp/18cm	岩波書店	1998	出版社寄贈
青木清	赤城山 花と溪谷:沢あるき/滝めぐり30選	214pp/19cm	上毛新聞社	1997	出版社寄贈
鈴木澄雄	心が豊かになる山歩き術:のんびり山歩きのすすめ	159pp/22cm	山海堂	1997	出版社寄贈
Harish Kapadia	High Himalaya Unknown Valleys [3rd Ed.]	336pp/23cm	Indus Publishing	1997	著者寄贈
S.Mehta & H.Kapadia	Exploring the Hidden Himalaya [2nd Revised & Updated Ed.]	190pp/22cm	Indus Publishing	1998	著者寄贈
Geeta Kapadia	The Himalaya in my Sketchbook	144pp/25cm	Indus Publishing	1996	著者寄贈

会務報告

【二月理事会】

日時 一月十四日(水) 十八時三十分
二十時十分

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 斎藤会長、小倉、竹内各副会長、吉永、伊丹、熊崎、絹川、勝山、村井、飯田、鰐坂、増山、森大蔵、宇田川、宮崎各理事、石橋、神崎各監事、平山、穴田、中川、平野各常任評議員

〔委任〕 大森副会長、田邊、坂本各理事、長尾、中村各常任評議員

○議事に先立ち、十二月末に逝去された大屋常務理事に黙禱の後、斎藤会長より年頭の挨拶があった。

【審議事項】

(一) 事務局員補充の件 吉永

庶務担当の宮澤職員より一月十日付で退職願が出されたが、年度末事務終了の五月末日まで在職することになった。後任職員補充(推薦・応募)に理事会、総務委員会をはじめ各理事も対応を願いたい。承認

(二) 事務局コンピュータの件 吉永
機器導入のため関係者八名で検討委員会を組織。九九年中に設置、一年間習熟後の二〇〇〇年対応。承認

(三) 会員サービスのためのネパール・トレッキング計画 吉永

支部関係だけで約八十名の内諾希望があり、首都圏会員にも広報の上、ポカラ博物館との交流、シバプリのシャクナゲ植林の見学などを組み込み計画。集委員会を取りまとめ、九八年秋季実施に向け再調査し、再度理事会に諮問する。承認

(四) 登山隊名義後援の要請 鰐坂

立教大学山岳部、立教山友会より立教学院創立百二十五周年記念『立教大学ガッツィヤブルムII峰登山隊・学術調査隊一九九九』に、名義後援と推薦状の交付手続きを、計画書・誓約書を添えて要請された。承認

(五) 海外登山基金助成支給 伊丹

海外登山基金委員会審議の結果、
①「日本山岳会青年部カンチェンジュンガ登山隊一九九八」に七十万円
②「メイト・ポラールパーバフィン島登山隊」広島県山岳連盟に三十万円の助成金を支給する。承認

(六) 会報等の掲載文の転載 吉永

佐久間福島支部長より、支部五十年記念誌編纂にあたり『山岳』『山』掲載の追悼文七編の転載許可願がだされた。承認

(七) 植元会長の写真掲載 吉永

(例)講談社より、アイガー・東山稜初登頂の写真の複写と週刊「日録」二十世紀一九二二年号九月の欄への掲載許可願が出された。承認

(八) サガルマータ登山隊推薦 大蔵

亜細亜大学体育会山岳部より登山計画書を添えて「98野口サガルマータ登山隊」に対し推薦と都岳連に対する推薦状交付要請があった。承認

(九) 委員会委員委嘱依頼 森

科学技術庁防災課より、昨年の青森八甲田自衛隊員のガス事故死、安達太良登山者のガス死亡事故に対する実態調査と対策委員会の設置のため、科学委員会担当の森理事に委員委嘱要請があった。承認

(十) 常務理事の委嘱 斎藤会長

大屋理事の逝去により、後任に現総務担当の絹川理事に常務理事を委嘱する。承認

【委員会報告】

●総務委員会・絹川

①一月十七日山梨支部新年会

②二月二十一・二十二日支部事務局担当者会議

③三月十四日平成九年度下期新入会員オリエンテーション

④「日本山岳会団体傷害保険」制度の利用について、未加入会員へメール発送。

●指導委員会学生部・宮崎

ビーコン・ゾンデ講習会を一月十七、十八日、大学山岳部二年生以上、若手OBを対象に、北アルプス神ノ田圃早大ヒュッテをベースにして開

催する。参加予定者二十〜三十名。
●図書委員会・飯田

小島鳥水没後五十年について問い合わせがある。

●資料委員会・鰐坂

インターネット・ホームページは晩餐会のデモンストレーション以降九百件のアクセスがあった。海外版(英文)は内容、範囲などを検討の上、増山理事にお願いする。三月上旬に第二回委員会を開催予定。

●指導委員会青年部・宇田川

「カンチェンジュンガ登山隊一九九八」は三月八日出発の予定。カンパ活動に入る。留守本部のマニユールを作成し二月理事会に提出の予定。

東京グリーンホテル 都内に3店舗654室

各種ご宴会、ご会合にご利用下さい



水道橋店 ●千101 東京都千代田区三崎町1-1-16 TEL.03-3295-4161

御茶ノ水店 ●千101 東京都千代田区神田淡路町2-6 TEL.03-3255-4161

後楽園店 ●千112 東京都文京区後楽1-1-3 TEL.03-3816-4161

●海外委員会・伊丹

①ヒマラヤ協会三十周年記念式典が一月二十五日に開催される。

②年次晚餐会イベントで、カナダ山岳会とのアルバータ・ピッケルの出会いが「岳人」と「山と溪谷」誌に掲載され話題となっている。

●医療委員会・増山

五月二十、二十四日に松本市で開催予定の「登山と高所環境に関する国際医学会議」の英文パンフを作成。

●財務委員会・吉永

①二月二日の平成十年度各委員会予算請求書提出期限をお忘れなく。

②スポーツ振興基金の助成申請通知(期間一月六日～二月六日)は、応募資格が厳しいが「国際医学会議」が該当と思われるので調査対応を。

③会費未納者に対して十二月に督促状を発送、本日まで四百五十万円の入金があり、会費納入率は九七・五パーセントとなった。

■会員異動

物故

松川一男(六九六九) 9・8・19

五十嵐正(二二〇五八) 10・1・8

岡本康夫(二〇二七四) 10・1・26

退会

伊藤敬一(四三〇八) 10・1・31

石川 修(一一〇五六) 10・1・31

河村忠明(九九六九) 10・1・31

岡本陸人(六二七六) 10・1・31
後藤あずみ(二〇八〇九) 10・1・31

31

川田盛人(九八八三) 10・1・31

山形歳之(九八四九) 10・1・31

那須博文(二〇七六五) 10・1・31

P・オーバーマイヤー(六八八三) 10・1・31

退会取り消し

京都大学山岳部(四一四九)

ルーム日誌

1月

6日 アルパインスケッチクラブ

7日 データバンク研究会

8日 常務理事会 集委員会 山学研

9日 学生部 フォトビデオクラブ

12日 図書委員会 アルパインスキークラブ

13日 二火会 山げらの会

14日 理事会

16日 青年部

19日 総務委員会 資料委員会

27日 自然保護委員会 百年史委員会

28日 会

28日 山岳編集委員会

29日 海外委員会 青年部

30日 海外委員会

31日 山学研

1月来室者466名

さんけんだより

平成10年度の開所と利用予約

上高地山岳研究所 山研運営委員会



山研(上高地山岳研究所)は、今半年の眠りから目覚めつつあります。

昨年は雨による上高地線の不通、道路工事などの影響もあって、利用者は七百八十四名(目標は八百名)でしたが、今年はさらに多くの会員の皆さんに利用していただくとうと、楽しいイベントを計画しています。

四月二十七日から利用できます。上高地開山祭があり、すべてがこの日から始まります。新装なった河童橋の横では安曇村有志のあづみ踊りやアルペンホルンの吹奏、

梓川河畔には模擬店も出ます。

四月二十七日から五月十日までの利用申し込みは、四月一日から事務局で受け付けます。利用日、会員名、会員番号、連絡先電話、利用人数を明記し、必ずファクシミリで申し込んでください(番号〇三―三二六―四四四一)。

五月十日以降の利用申し込みは直接「山研」へ。

また平成六年四月から管理人をお願いしていた内田二葉さんは昨年をもって退職し、今年から新管理人に変わります。プロフィールなどは次号でご紹介します。

INFORMATION



◆中・上級者対象山岳スキー研修会

指導委員会

中・上級者を対象に山岳スキー研修会を開催します。今回は相当の体力とスキー技術を要求されますので初級者はご遠慮ください。

日時 四月十日(金)～十二日(日)

場所 白馬岳周辺(ベースは早稲田大学ヒュッテ)

内容 ①梅池から白馬岳往復の実戦的研修

②山岳スキー応用技術

講師 熊崎和宏(指導委員会理事)

松原尚之(指導委員会委員長)

他

参加費用 三万円(小屋泊 宿泊費 食費を含む)

問合せ 詳細要項をご希望の方は、

熊崎和宏(〒一八〇〇〇〇〇〇〇)

一 武蔵野市吉祥寺北町三一五―二四―三〇二)まで官製

葉書でご請求ください。

◆古道を尋ねて・顔振峠

図書委員会

義経ゆかりの顔振峠を散策します。

日時 五月九日(出)(雨天決行)

集合 十時 西武池袋線吾野駅改札口(池袋八時三十五分快速急行・長瀬三峰口行 吾野駅九時五十六分着が便利)

申込 不要(当日集合場所へ)

◆若葉会山行

集会委員会

寅年にちなみ栗駒山国定公園のほぼ中央にある虎毛山で行います。

日時 五月二十三日(出)～二十四日(日)

集合 現地集合(秋の宮温泉郷)

費用 一万三千元程度(宿泊費)

申込 住所、氏名、年齢、会員番号を明記、返信用封筒を同封の上、日本山岳会集会委員会宛

締切 四月末日 定員五十名

*申込者には詳細案内を送付します。

◆春を撮ろう・カメラハイク

フィルムビデオ委員会

新緑の山で春を撮り歩きましょう。

日時 五月二十四日(日)(雨天中止)

集合 陣場山山頂に十二時(正午)

参考 山頂へのコース 京王八王子駅―バス―陣場高原下―歩き―和田峠―陣場山頂(他にもコースあり 任意でコースを選び山頂へ)

内容 山頂で新緑撮影 ポイントな

どレクチャーします

講師 フィルムビデオ委員

申込 不要

問合せ 上北和夫(TEL・〇四三三―六六―五二三)

羽田栄治(TEL・〇三―三三九

九―三九七五)

◆春の山行案内

ジャック93会

白根三山の展望、桃の花、ワインのテイスティングを楽しむ計画です。

日時 四月十二日(日)

場所 甲州高尾山

集合 中央線勝沼ぶどう郷駅 十時

申込 大場悠平(鎌倉市常盤一―二〇六 TEL・〇四六七―四六一〇五〇二)へ三月末日までに

◆一九九八年自然保護全国集会

自然保護委員会

日程 十一月十四日(出)～十五日(日)

場所 京都府北桑田郡美山町

町宮かじか荘および芦生の森

担当 篠崎 仁(TEL・〇四七四―四五一〇三七四)

*詳細は追って会報でご案内します。

◆東京都山岳連盟事務所移転

名称 東京都山岳連盟

所在地 〒一〇四―〇〇三―一

都中央区京橋一―九―九 湘南

産業八重洲ビル四階四〇一―号室

TEL・〇三―五五二四―五二三―一

FAX・〇三―五五二四―五二三―一

◆編集後記

毎号、予定を上回る原稿が集まり、JACの盛り上がりを感じて、編集作業は嬉しい悲鳴をあげています。

毎号のように投稿くださる常連会員の熱意はありがたく受け止めていますが、すべての会員に広く、公平に、という方針で偏らない会報を心がけています。

会の発展につながる論考や会員の皆さまのお役に立つ、あるいは読み応えのあるものは、すべて掲載するよう努めています。意欲あふれる感性豊かな投稿は大いに歓迎します。しかし、限られたスペースです。原稿は冗長を避け、簡潔に要旨をまとめてください。

なお、依頼原稿、投稿欄以外の原稿は、事前に会報担当理事までご連絡くださるようお願いいたします。

さらに魅力ある会報になるよう、皆さまのご協力をお願いいたします。

会報編集委員会

日本山岳会報 山 634 号

1998年(平成10年)3月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 斎藤惇生

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社